

空のっく風景

BORDERLESS SKY

文・大庫直樹

Illustration: Katsube Tomomi

第9回 富山県高岡市

ミスター&ミセスNの民泊



ミセスNに数年ぶりに邂逅したのは、とある勉強会の同窓会のことであった。その勉強会は、私よりもひとまわり年上の方々を中心に、5年ほど前に定期的に開催をすることはなくなった。その代わり、毎年1回同窓会という位置づけで会いましょうということになっていた。それも1、2度おこなったきりになり、間が空いていた。その久しぶりの同窓会に遅刻をしていくと、ミセスNの前の席が空いていたのだ。

ミセスNは、中途からこの勉強会に参加されるようになったのだが、気に入っていただけたのか、ご主人のミスターNもその後勉強会のメンバーに加わることになる。不思議なのだが、夫婦そろって出席することは滅多になく、どちらか一方だけが出席することが常だった。この同窓会もミセスNだけの出席だった。

同窓会ならではの、ひとりひとりの近況報告が始まる。やがてミセスNの順番となった。彼女は、「主人の実家で民泊をやり始めた」と思いもよらぬ近況を語り始めた。ミスターNはもともと裁判官で、ミセスNはコンサルタント。バリバリのキャリアを知る以上、思いがけないというのが偽らざる印象だった。

ちょうど真向いの席に座った私は、ミセスNから新聞に取り上げられたときの記事を見せてもらった。ご夫妻が宿泊客に食事を供する写真は、なんとも言えない温かさが滲み出ている。私が若いころ、旅したときの、人と人とのふれあいのようなものが、映し出されていた。「僕も泊まりに行っていいいですか?」そんな言葉が思わず口をついた。

東京発着のGoTo トラベルのキャンペーンが始まった10月、私は北陸新幹線と「あいの風とやま鉄道」を乗り継いで高岡の街に辿り着いた。さらに高岡駅からローカル線にのって4 駅目の戸出駅に向かう。迎えに来てくれたミスターNの車で5分ほど、ひとつひとつの家が水田に囲まれ点在し、1500年に渡り、砺波平野に住む人々が、自然との共生を図ってきた美しい散居村の中を進む。多くの家が昔ながらに高さ10m近いカイニョ(屋敷森)で守られている。ミスター&ミセスNの民泊も、こうした農家の一軒家であった。

もともとは、ミスターNの実家だったという。ただご母堂が逝去されて、この家をどう守ろうか。ひとつの答えが民泊にすることだったという。高岡市では3番目の民泊。玄関前にはそれを示す許可書が掲げられている。

築60年の一軒家、玄関を跨げば、純日本家屋の薫りが鼻を掠める。木々の柱に梁、壁の漆喰、畳の部屋。玄関近くの客間には、今ではあまり見ることがなくなった欄間。透かし彫りの梅と竹に鳥が飛ぶ。どこをみても非日常の空間だった。

到着後、お決まりのお茶と和菓子を頂いた後、散居村を探訪におらり。ママチャリを貸してくれた。汗をかいて戻れば、お風呂にドボン。高級旅館と違って、自由気儘に我が家のように過ごさせて頂く。やがて、ミスターNのお話を伺いながらの楽しい夕食が始まる。メインの料理はご近所の仕出し屋さんの刺身、鮎の塩焼き、ズワイガニの酢漬、いずれも地のものだという。新鮮なだけあって、口の中で甘く溶けていく。

でも、それだけではない。脇を固めたミセスNの手料理も素晴らしかった。らっきょう、煮豆、枝豆、南瓜の煮つけ。ミセスNが拘って近くのJA で入手した農家直売の農作物を手料理したもの。清んだ野菜の味を生かした一品の数々。

締めは、ミスターNの揚げた地野菜の天ぷら。一般家庭で揚げたとは思えない、あっさりとした仕上がりが。民泊してお客様を迎えるたびに料理の腕前があがったというのは、ミセスNのコメント。そしてミスターNが淹れてくれた日本茶は、秘密の作法で渋みと甘みのバランスがとれた究極のお味。

何から何まで堪能してしまった。満腹なお腹を抱えながら、ミスターNとの話は続く。社会・経済から政治、学生時代の思い出、裁判についての私の素人丸出しの質問にも丁寧に答えてもらう。代わりに私も大学で学んだ数学や自然科学のことをお話する。延々と4時間くらいは、話しただろうか。外からはマツムシなのか、スズメシなのか、虫の声が聞こえるだけ。夜の静寂が横たわっていた。

一夜明けると、鳥たちの囀り。朝食前の散歩。スズメ、カラス、シロサギが田園地帯を舞う。ピンク色の空と緑の水田が美しいコントラストをなしている。朝食はハムエッグとポテトサラダ。ご近所から頂いたという瑞々しい柿と梨も。どちらの家も自家用に野菜や果物を栽培していて、分け合っているという。

出発前の短い時間を利用して、敷地に群生している茗荷を探りにミセスNの後をついて回った。地面から飛び出し花が咲いているのは、旬を過ぎていているという。筈と同じで、地面から見えないか見えないくらいのもを掘り起こすと、食べごろだという。いくつもとって、洗ってビニール袋に入れてお土産に。

最後はミスターNに車で戸出駅まで送ってもらった。2両連結のローカル列車の前で別れの挨拶。勉強会で何度もお目に掛っていたミスター&ミセスNの別の顔を窺うことになった。

若いころ、旅先で出会う人と人との触れ合いが嬉しかった。ミスター&ミセスNの民泊に泊まってみて、あのときの触れ合いを感じた。この既視感は何なのだろう。思い返してみれば、大学生だった私がユースホステルに泊まり歩きながら、日本を旅していたあのときの温もりと同質のように感じる。ベアレントさんがいて、食事後の皿洗いのような簡単なルールはあるけれど、あとは概ね自由だった。何をするか当てがあるわけではない。流れる時間の中に身を委ね、自然を満喫し、重いリュックを背負って歩くだけ。

高級旅館はおもてなしと言うけれど、サービスを受ける前に心付けを配ったり、食事の時間は宿本位の選択制だったり、私はあまり寛いだ気分にはなれない。まるで「注文の多い料理店」ならぬ「注文の多い宿泊所」にいるようだ。旅館の身勝手な機械化されたプロセスの中に入ることを強いられる。これをおもてなしと思っているのは、一部の日本人だけだろう。グローバルスタンダードでは決してない。

民泊には気ままな時間が流れていた。ホスピタリティの原点に触れたような気がする。懐かしさを呼び、また訪れてみたいと願う時空間だった。



大庫直樹 (おおご なおき)

経営コンサルタント。1985年にマッキンゼー・アンド・カンパニーの東京オフィスに入社。20年間の勤務の後、2005年にGEコンシューマーファイナンス株式会社に入社。その後、2008年にルートエフ株式会社を設立し、代表取締役を務める傍ら、金融庁の参与、広島県の特別参与としても活躍。